「神を愛する者」

ガラテヤの信徒への手紙３章２６－２９節

森島 牧人 牧師

信仰生活の長いキリスト者にとっても、最近キリスト者として歩み始めた人にとっても重大な問題は、「信仰とは何か」ということです。先回、この信仰についてパウロが面白い表現をしているのを、ガラテヤ書を通して学びました。

そのパウロのユニークな表現とは、「信仰が来た・現れた」というものです。この「信仰が来た」ということは、「キリストが来られた」ということとイコールで、まさに「信仰の根拠が来た」ということになります。神が、キリスト者としての新しい在り方を賜物として私共に与えられた、それが信仰であると、パウロは言っています。私共の現実が変わって新しくなり、自分の生き方がはっきりと形になったということ、それは私共の心や気の持ちようなど精神的な回路・心の問題とは全く別のものです。実に信仰とは私共の外から来たものであり、外にあるものとつながっているのです。その外から来られたキリストと私という一つの人格を持った存在がつながることによって、信仰の内容は出て来たのです。キリストの到来によって、全世界が新しい神の現実に変わったということですから、まさに信仰とは「in Christ」であり、キリストの中に自分を持つと言ってもいいと思います。

つまり、今まで抱えていた人間としての重荷や罪を、キリスト・イエスと歩む中で、そのすべてをキリストに委ねる、これこそが神からの賜物であり、恵みであり＜カリスマ＞です。自分に信仰があるのかどうかさえ分からない私共のところへ、神がキリスト・イエスを到来させてくださった。主イエスが私共と共にいてくださることになった。信仰とは、キリストに伴われること、そのことに感謝している状態のことなのです。

私共のよく知っている言葉に、「心頭を滅却すれば、火もまた涼し」という、禅僧の辞世の言葉がありますが。一途な精神の働きが自分の内にあれば、どんな苦難に出会っても苦しさを感じることはないと言った意味で、ある意味、信仰の極意のように伝えられています。しかし、今申しました聖書の語る信仰は、これとは全く違っています。聖書の信仰は、心の問題ではなく、私たちの体の外で起きていることが重要なのです。私共が正しいから、または求めたから神は来てくださったのではなく、罪の中で悶々と生きている私共を、神が憐み、主イエスを送ってくださったのです。このことによって私共は初めて「神が我らと共におられる」、＜インマヌエルの神＞と共に生きて行けるようになりました。神の恵みの賜物として人間に与えられた「キリスト・イエスにある」という在り方、それが信仰であるとパウロは言っているのです。

ガラテヤ書３：２６には「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。」とあります。神の子であるということは、神と一緒ということです。「神の子たち」と複数になっているのには、キリストを長兄とした兄弟姉妹として神の子とされたという重大な意味があります。「in Christ」によって私共と神との間には、何者も引き離すことの出来ない親密な関係が打ち立てられたのです。「救いが完成された」とイコールの救いの最後の言葉「神の子とされた」は、＜キリストにあって＞起こることだからです。

ガラテヤ書３：２７には、「バプテスマを受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、・・・」とあります。バプテスト派では、私共は水に沈められますが、それはキリストの中にバプテスマされたということで、そこから上げられた時、私共は神の子とされているのです。

ガラテヤ書３：２８には、「そこではもはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく・・・」とあります。神の子とされたところには、いっさいの差別はなく、世界中のすべての人々が、人間の究極的な状態・形に於いて兄弟姉妹であり、イエス・キリストに於いて一つであるということで、私共の存在、そしてその在り方、未来はすべては「in Christ」にかかっているのです。

今日は７月の第一主日で、世界中のすべての教会で聖餐式が執り行われています。バプテスマを授けられた者は皆、毎月の第一主日にはキリストにある神の子たちの食事である聖餐に与ることになっています。それは「キリストの出来事」に与ることです。何者によっても切り離されることのない神との交わりによって、罪から解き放たれ自由となった私共キリスト者を、神から隔てるものは何もありません。

神の子たちと共に主にあって一つにされる場面である聖餐式を、今朝も世界中のキリスト者と共に、それに与って参りましょう。

（説教要約　羽入田悦子）